

丹沢は山伏が切り開いた



小沢幹さん

認定へ國指定も内定、若のメンカとしてしまる國に知れ渡った茶の葉煎茶、主婦結婚一ノ子などが二百年も前に中野伊勢
原町向の山伏たちによって開闢されたことが七百、町立山田学校社会教諭、小沢幹（いの）さんと一緒に「国町向」、「五
八丁」の調べで明らかとなり、発見になつてゐる。山伏たちの手いた「茶（ちや）」を書いた「茶（ちや）中記録」の発見によってわかつた
わらだが、これにより今までせんせんわからなかつた丹波の地名の発じりもはじめて明らかになると「丹波美古里」の唯一の貴重
な資料として、近く東洋財團保護資金会へ正規の報告する。

走コースをひとり焼き米一升だけ

まつた「電報施設」があり、所付近が鳥居原町でいたことを、今の丹波の地名で覚えていられるらしい。また、そこから岩山の行
きは、今も残らうのがある。

地名の由来もわかる

**伊勢原町
の小沢氏
修験コース記録発見**

小沢先生は自分の家の先祖が曰向の山伏だったことからの研究を続け、全国を歩いているが、こんど伊勢原町から「伊勢原町史」の編さん委員を嘱咐され、さうして突っこんで研究を続けていたところ、近所のこれも山伏の子孫である、

白山伏の修驗ノ文

地区、大山寺のある大山、光勝寺のある八宮（愛川町）の三五所）であったが、どの山伏のことも当論である。この「秘密主義」の影響で資料はなにも残っておらず、たゞ子孫が口伝で伝えるのみだった。

クラスが一朝一行を必ず見ること、行者店は通常修業者と祖「授（えん）」の行者」があつたこと、新大口は「尊（そん）」がまつてあつたこと、墨を尊（そん）といふのは、ここに自然石（前ががみで似似）であり、これを「くる尊（そん）」〔墨尊（そん）〕と称してへどこと

始のうつた
大日のうつ
塔ヶ山のうつ
黒川のうつ
じがのうつ
たほのうつ
葉のうつ